

經濟ニ當時の書類に左の如く記されてある

一教員給料 金三十六圓
一授業料 金五圓
一書籍器械買入費 金十五圓
一營繕入費並に雜費 金十四圓
一雇人給料 金二十圓
右費用總計 金九十圓

葛島及四德ニ葛島はこの年分離獨立して一校を設立し三物小學校と謂ひ四德は私立學校生徒組合を設けた

明治七年

教員ニ桑原保松

生徒ニ二月在學生男百六人女二十四人計百三十人

經濟 收入百五十圓六十九錢

内譯 利子百五十圓 授業料六十九錢

支出百三十二圓七十五錢

報告書ニ當時筑摩縣權令に報告した書類を左に示さん

第十九番學區伊那郡大草村

一報國學校

一教員

一世話掛

一戸數

平民桑原保松

十人

四百五十六軒

一人 口
一生 徒

一元 資 金

右之通りニ御座候

明治七年五月三日

資金増募ニ永山筑摩縣權令は自ら各小學校を巡回して資金増募を勸奨した當時の書類を左に示さん
以書付奉願上候

一金八百圓

一金二百圓

一金六百十五圓

一金三百八十五圓

合計金二千圓也

右は今般御巡檢被遊御熟奉御説諭難有感銘仕候依て右の資金募集壹割五分の利子を以て從來益盛大可仕候間此段奉願
候以上

明治七年五月四日

筑摩縣權令 永山盛輝殿

副戸長 桑原茂喜次
同上 下平七郎
同上 鹽澤直造
戸長 小林伴七郎
同上 宮澤覺五郎

沿革誌上の主要事項

沿革の大要

教員四名、生徒は五年七月二十六日の開校の時三名、明六年には男八二 女五となる。

明治六年の費用、校園給三八円を含み九〇円。

明治八年教員桑原保松他助教五、生徒二二二、同年新校舎を現位置に建てる。

明治一八年大草、葛島、四徳連合村を作り大草学校を本校とし他を分校とする。校長桑原保松。

明治二二年南向村となる。

昭二四年日曾利部落飯島町に合併。

昭二三年片桐村と合併、中川村となる。

地区出身の著名教育者、学者

大工原 潤太郎

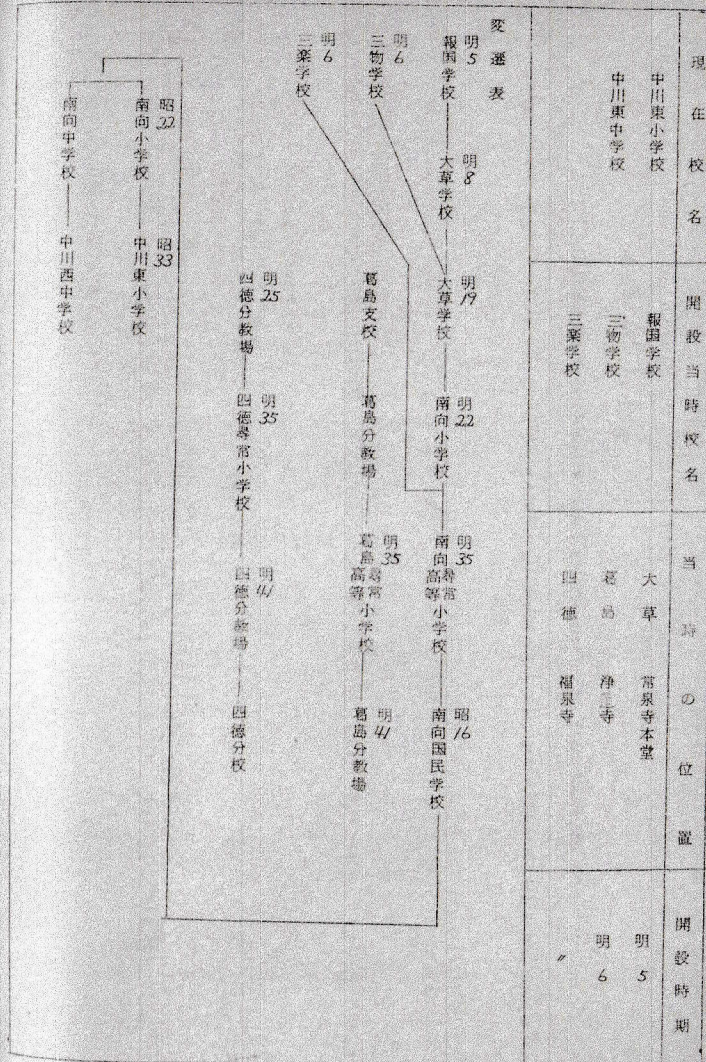
(明元—昭九) 明治二七年帝大農芸化学科卒、後九州帝大総長、本邦農学界の泰斗先賢。

中 沢 昌 雄

(明一一—大九) 臨川とし生家天龍庵、後南安村に入む、帝大電気工学科卒、電気界の權威者であつたが文芸評論界に名をあらわし、創作「嵐の前」は有名。

桑 原 保 松

(嘉永五—昭九) 報国学校の塾生となる、後教師養成所(後の師範学校)に学び、母校に訓導となる。教え子遠山英一の歌謡「豊島」により和歌を作る。村長・県議等も数回つとめた。書もよくした。



我村内なる陸軍大尉寺平宮次郎君沙河の戦に再度負傷したるにも拘はらず敵陣に勇進して殊功を奏したりとの報に接して

ふたゝの矢玉はおへど仇のたてたけき心に貫ぬきにけり

日本軍人の行動を

大君につかふる道の一筋をふみもたかへぬ日本ますらを

友人の戦死を悼みて

歸らしと門出にいひしことの今はまことなるう悲しき

折にふれて

山をぬき巖をわりてものゝふは命かきりに仇をせむらん

旅順陥落すとき

皇國のしるしのみはたなひかして君万代どうたふ今日かな

旅順口陥落せるとき

不落てふとりて破れて白玉も黄金もすへて手に落ちにけり

攻めかたし落しと仇のはこりたる港もわれにわけ渡しけり

一月二日の夜敵將ステッセル降伏すとき

ものゝふのいさをし見えて新年に鶴も玉もすてつせるかな

旅順陥落

高坂 謙輔

桑原 保松

全

阿部 良伯

全

矢島 桂城
川畑 三藏

鈴木 清三

攻かたく落もやらすといふ城も打くたかれて仇は下りぬ
まち／＼しこの港の山の上はたかくかゝやく日の御旗かな

軍國の民

米麥も黄金も使ふ時來ぬと軍のかとにさゝく國民

陣中冬月

吹雪せし雲間をまれてさゆるかなどりの上の冬のよの月

東郷大將の凱旋を迎へて

千万の人とむかへんためしなきいさをたてゝ歸る君をは

二〇三高地を占領すとき

くろかねのつなもとほりもどけにけり旭のみはたなひくまに／＼

老いたる父を残して戦死せし兵士の心をおもひて

散りてゆく花の心やいかならん老木の枝をあどに残して

折にふれて

繪筆をはとかまにかへて西伯利亞の野邊のしこくさ刈つくさはや

戦争中新年をむかへて

みいくさのかちを祝ひて新玉の年のほきこといふ人もなし

出征の軍人

櫻井 實壽
山本 惠篤

小川 秀英

佐々木 春綱

佐木 秀敏

坂本 立元

三枝 宣

瀧本 善太

中村 守庸

秋の野にてる月かけのさやけきは千草につゆのおけはなりけり 全 井倉 越
 夜もすからうよきし萩の風たぬてしけくもおけるつゆの白たま 全 東松 正淳
 ぬは玉の夢よりなほはかなきはくさ葉にむすふつゆのしら玉 全 水谷 徳三郎
 ちりやすきものにはあれと草のはにおく白つゆのうつくしき哉 全 吉村 八
 更渡るまゝにしめれる虫の音はしけくもつゆのおきまざるらん 全 土本 新平
 くる秋のしるしなるらん浅茅はあらさつゆふかくなりまざる也 信州 桑原 保松
 八束たる稲葉したれておくつゆにゆたけき秋のはどうしらるゝ 全 高坂 謙輔
 なく虫のなみたなるらん朝ごとにくさの葉末におけるしらつゆ 上州 木暮 魯信
 ひるのまのあつさは夏にかはらねと千草にけさは露ろみぬける 全 小林 幸成
 たつ秋のいろを千草の葉にみせてをれんばかりにむすふ白つゆ 全 齋藤 八重子
 うよくと葉末をわたるあさ風にまはさき花のつゆろこはるゝ 全 狩野 克子
 朝ごとに花のひもとくあさはにむすひろめたる秋のしらつゆ 野州 田村 想川

村雨のふりしあとかとおもふまでゆふつゆしけしのちの萩はら 全 田村 家壽子
 秋たちてにはの萩はらふく風にたぬすみたるゝつゆのしらたま 全 田村 恒子
 わか竹の葉末にのはるつゆみぬて月のひかりもあさめきにけり 磐城 志賀 竹溪
 朝な夕なつゆのやどりてやちくさもしころにみゆる宮城野の原 全 齋藤 多吉
 つらぬきし玉とみるまでさゝかにの糸にしけくもおける白つゆ 全 瀧内 秀明
 草むらのほたるとみしはうれなれて月にみかけるつゆのしら玉 全 松原 たか子
 ものゝふかみたま祭りしおくつきの手向の花につゆろこはるゝ 岩代 湯田 久次
 さゝかにのすかさあはれにたゆみ是秋のあしたのつゆ重くして 全 星 伊策
 朝ごとにおくつゆ深くなりぬらんすゑうちふしぬにはの萩はら 陸前 高橋 元則
 おきてこうみるへかりけれ手にどれはやかて消行く野への白露 全 遠藤 千園
 ささうむる千草の花をわけゆけはつゆのたまちる宮城野のはら 全 阿部 功雄
 みやき野や千草の花のいろゝにおきもへたてぬつゆの白たま 全 大友 正文